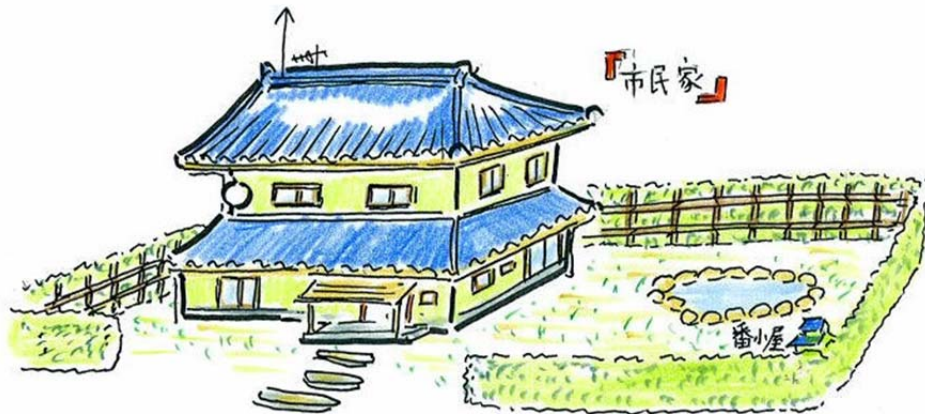


◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女^{えん}援ちゃんには何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

^{てんとく}点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

主な登場人物



支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

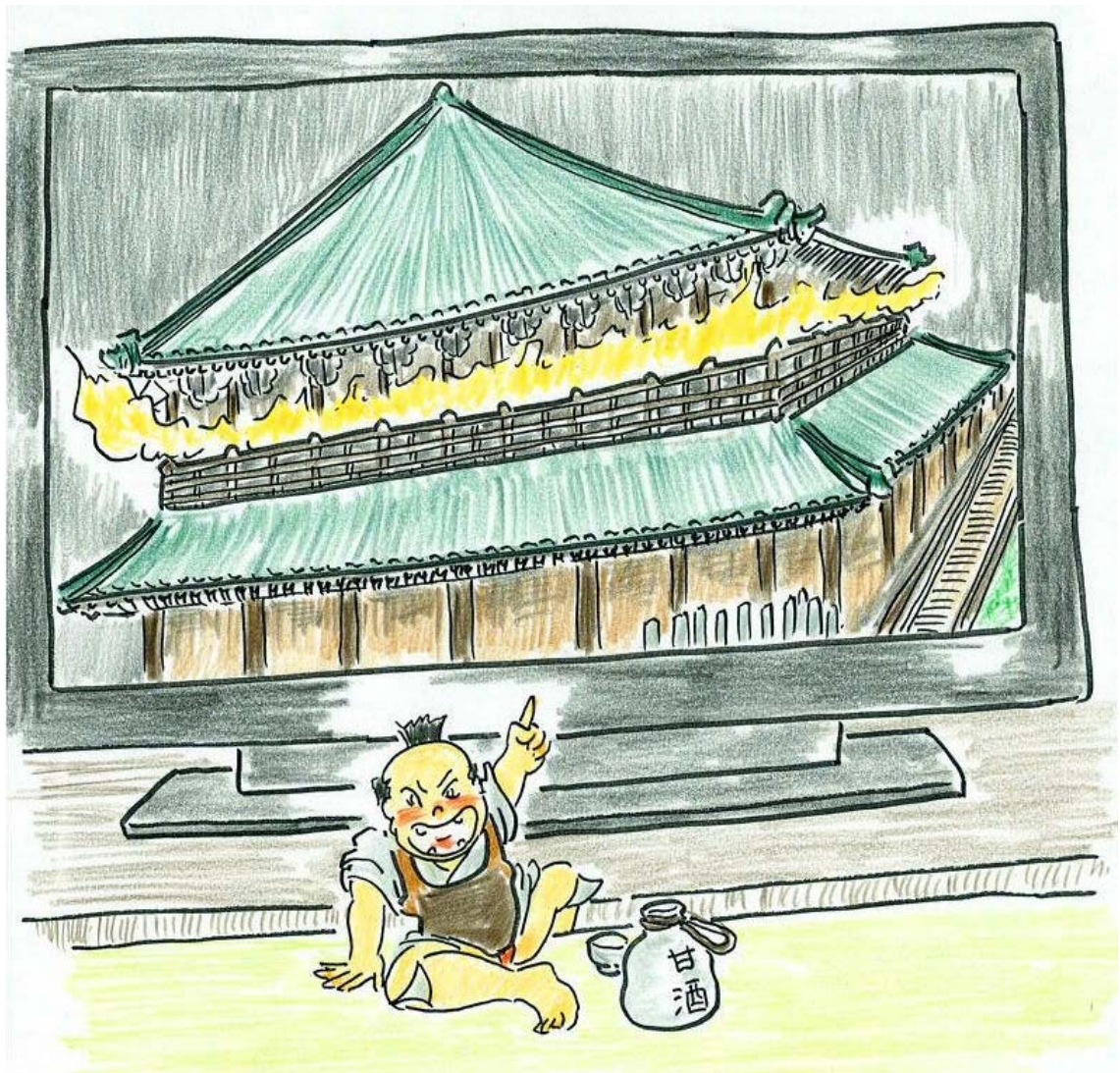
Vol.28

「な、なんちゅうことを！ だ、旦那様、み、見てください。あの坊主ども
ときたら、仏に仕える身だっのにとんでもねえことをしてかしてやすぜ。」

夕飯を終え、すっかり心地よくなり炬燵でうたたねをしていた拙者は、だらだ
らと甘酒を飲みながらほろ酔い加減のご助の叫び声で目を覚ましたのじゃった。

「ど、どうしたのじゃ？」と拙者が尋ねると

「見て下せえよ。」とご助が指さすテレビジョンの方を見ると、NHKのオンデ
マンド放送『新日本紀行：東大寺二月堂のお水取り』が放映されておったのじゃ。



「おお、お水取りか・・・凄いのお」と拙者が二月堂の回廊を^{たいまつ}松明を持った
連行僧が走る勇壮な奈良の春の風物詩に目を細めておると

「だ、旦那様。何をのんきなことを！世界遺産の東大寺ですぜ！あの馬鹿ど
もに説教してやらないといけねえですぜ。」と酔った顔を拙者に近づけてきた
のじゃ。

「く、臭っ、酒臭い顔を近づけるではない！あれはな、修二会と言ってな、
法会の中の大切な行事の一つなんじゃ。」



「しゅ、しゅ・・・に・・・え？」

「そうじゃ。仏の前で犯した罪を懺悔する修行でな、毎年、今の時期に二月
堂で行われる大切な行事なんじゃ。」

「ぞ、懺悔・・・ですかい？」

「そうじゃ懺悔じゃ。ああやって懺悔するとな、仏様のお許しが得られるん
じゃよ。」と答える拙者の話を、ご助はテレビを食い入るように見ながら聞いて
おったのじゃった。



翌日、お屋敷の点検を終えた拙者は、夕飯の準備のため先に帰らせたご助を探して台所まで来たのじゃが、そこにご助の姿は見当たらんかった。

「おっかしいのお、あの食いしん坊が・・・飯の支度もせずに何処に行っておるのかのお。仕方ない、今晚は儂が作ってやるか。」と拙者は冷蔵庫を開いたのじゃ。

「卵が・・・2個にハムか、ハムエッグ定食じゃな。フライパンにオリーブオイルをっと・・・ありゃ、油が無いの。瓶ごと無くなっておるが・・・」とテーブルの方を見やって驚いた。そこにある筈のテーブルが無くなっていたのじゃった。



「やっテーブルが？ それに昨日買った箸や好物の切り干し大根まで無くなっておる……。ど、ど、泥棒か？ご助、ご助っ、おらぬか！ くそっ、このような時にご助の奴は何をしておるのじゃ！とにかく警察じゃ。」と拙者は電話を掛けようとしたのじゃ。

その時じゃ、お屋敷の方から

「ちゅごいちゅごい、ぼすけえ、奇麗ぢゃ。ほめて遣わす。」と姫様の声が。

「凄い凄い、ご助奇麗じゃだと？ ご助め、この非常時に姫様と遊んでおるとは何事じゃ！」と拙者は声のする方へ駆け出すと、声のした方に向かい

「こらご助、晩飯の支度もせんと何を姫様と遊んで……。遊んで……。あ？ ああっ??」と叫ぶと、そのまま言葉を失ってしまったのじゃ。

お屋敷の庭で拙者が見た光景は、箸の先にくくりつけた切り干し大根に火を着け、その炎を上げた箸をテーブルの上で振り回すご助の姿じゃった。



「な、な、何をしておる馬鹿者が！ やめんかっ！ 直ぐにテーブルを降りて火を消すんじゃ！！」と怒鳴ったのでござる。

しかしご助は拙者を一瞥しただけで

「あ、だ、旦那様・・・い、今はまだ止めれないんでさ。」と一向に止める様子がなかったのじゃ。

「ええい馬鹿者が！いい加減にしろっ」と、拙者はお屋敷の背戸^{せと}（意：勝手口）まで走ると散水用の蛇口を開き、散水栓のホースリールを延ばし、テーブルの下で放水口を構えると頭上のご助目掛けてトリガーを引いたのでござる。



プシュシュシュシュ・・・と勢いよく放出された水がご助と炎を直撃し、炎は瞬く間に消え去ったのじゃ・・・が、

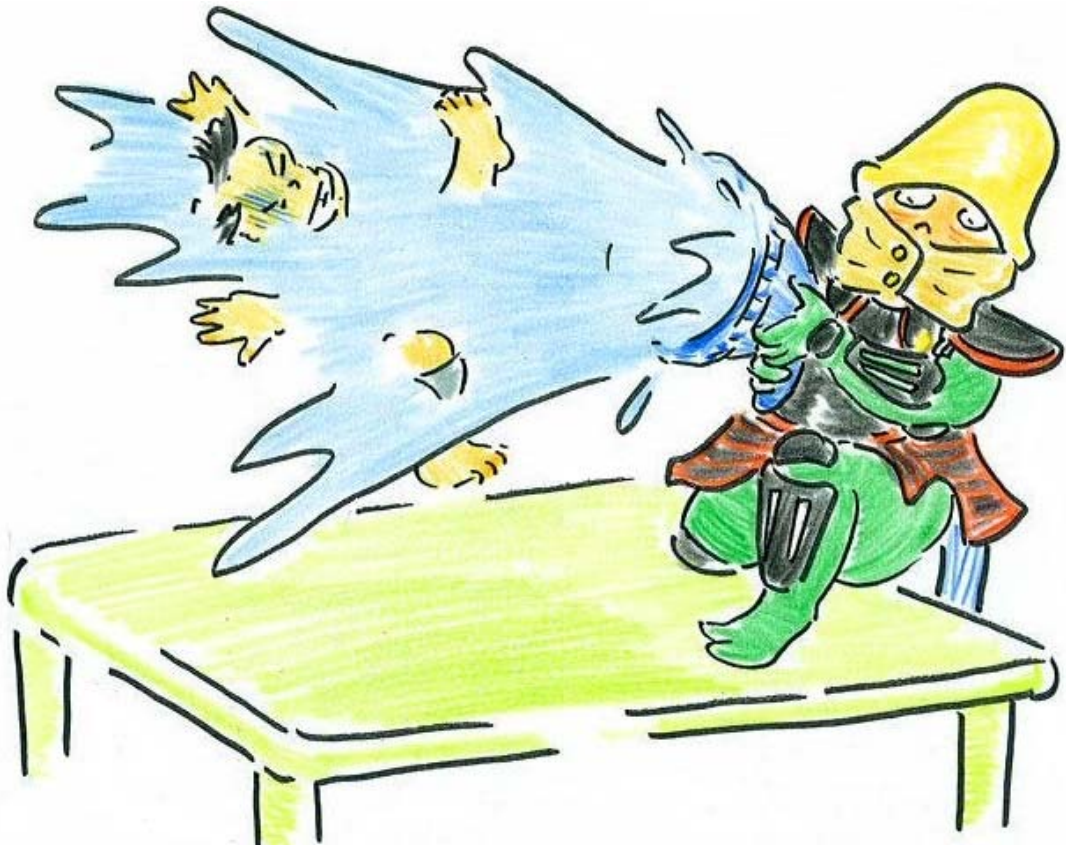
「な、なにしやがんでえ・・・あああ、大変だあ」ご助はそう叫ぶとオリーブ油を満たした茶碗に菜箸の先の切り干し大根を浸すと、滴り落ちる油も気にせず傍らに立てた蠟燭の炎へと運んだのじゃった。

ポオオと、鈍い音を立て再び切り干し大根が炎を上げるのを見た拙者は

「ポケナスが！ いい加減にしろっ！」と叫びながらテーブルの上へとよじ登り、今度は蠟燭の炎を消してからご助目掛けて放水したのじゃった。

拙者の的確な判断によってテーブルの上の炎は消え、火災の危険は無くなり、

「ふははは、ご助よ、支援消防隊の実力思い知ったか。」と拙者は勝ち誇ったのじゃ。



「な、なんてことを・・・だ、旦那様でも許さねえですぜ。」 そう言うにご助は手に持った菜箸を槍のように構えると拙者に向かってきたのじゃ。

「お、おのれ主人にむかって槍を向けるとは臣下の道に背く外道の所業よ！拙者も賤ヶ岳の七本槍、前田家に連なる支援なり。いよいよ成敗してくれるわい。」 と言うと片割れの菜箸を拾い、ご助と対峙したのじゃ。

「うぬぬぬ・・・ご、ご助めがあ・・・」

「くううう・・・く、くそがあ・・・」

対峙することしばし・・・先に腕がしびれてきたご助の様子を拙者は見逃さなかった。

「そおおりゃあ」

しかし・・・ご助の胸を打ち抜くはずの拙者の槍は、姫様が差し入れたお盆に跳ね返されたのじゃった。

『ビィィィイン』と激痛が両腕に伝わり、拙者は槍を落としてしもうたのじゃ。



「し、しまった！」と叫ぶ拙者を見下ろしたご助は

「し、しめたっ！」と叫ぶと普段のご助とは思えぬ素早さで槍を繰り出してきたのじゃった。

「うわあああ！」と覚悟し、目をつむった拙者じゃったが・・・ゴオオンという音だけが響いただけで何も起きなかったのじゃった。

「な、なむさん・・・」と小声で言いながらそっと目を開けると、そこには
姫様に盆ではたかれ気を失って倒れたご助の姿があったのじゃ。



「な、何がおきたのですかの？」と拙者は恐る恐る姫様にお聞きしたのじゃ。

「ちえん、ぼすけはのお、ちえんに教えてもらった、じゃんげ（懺悔）をし
ていたのぢゃ。」

「???拙者が・・・教えた懺悔ですと？」

「ちょうぢゃ。」

「・・・拙者には訳が分かりませぬな。ただの火遊びにしか見えぬあれのど
こが懺悔なんですかな？」と聞きますと姫様が

「ちのう（昨日）の夜、東大寺のしゅにえとかみたんじゃろ？」と言われ初
めて

「ははん、あのお水取りをまねたんですか？ ご助のことだから、どうせ隠
れて甘酒を飲んでしまったとか、隠れて天ぷらを食ったとか、隠れて・・・」
と思いつくまま悪行をあげ連ねておりますと姫様が

「ちゅごいの（凄いの）ちえんはご助の考えがちえんぶ（全部）わかりゆん
ぢゃな。15個ほど じゃんげしてから、次に旦那様のじゃんげじゃと、始めた
ところぢゃ。」

「せ、拙者の・・・懺悔を？」

「ちょうじゃ。お屋敷の点検のときに砂糖を盗み食ったとか、ミーちゃんの
キャットフードを盗ったとか、ドライヤーで空中遊泳ごっこをしたとか・・・
一杯あるから大変ですじゃとゆうてな・・・『あと10個で満願ですじゃあ』と
頑張っていちゃによに・・・」



「さ、さようなことを・・・！ばかな奴よ。」と言いながら、拙者の目からはうれし涙があふれてきたのじゃった。

次の日

「す、すまんかったのおご助。」と姫様からお聞きした話に続けてご助に詫びると

「い、良いんですよ旦那様。あっしこそ勝手なことをいたしました。」とご助。

互いの非を謝り、仲直りいたした拙者達はお屋敷の点検に向かったのですが

「あっ援！ ごま油と菜箸持って何してるの！！待ちなさいっ、待てクソガキがっ！」

お屋敷で響く奥方様の怒鳴り声を聞いて



「ご助、おのれののせいじゃ。姫様が懺悔ごっこを始めたではないか。」と
叱れば

「いや、姫様にちゃんと説明しなかった旦那様が悪いんですぜ。」と言り返され、

「なにを！」

「なんですかい！」と、またしても昨夜の蒸し返しになってしまったのじゃった。

はてもさても・・・ものいことじゃのお。

(おわり)